

【2025 年度/専門科目領域/専門科目群/リハビリテーション学科 理学療法学コース/理学療法学科】

科目名	ナンバリング	区分 (必修・選択)	単位数	履修年次	開講学期等
評価実習	PSP33-014	必修	6	3	後期 (集中)
担当教員	研究室	電子メール ID		オフィスアワー	
坂本 祐太 他	D310	y.sakamoto		火曜 13:00~14:40	
授業の目的・概要	<p>【目的】理学療法を実施するにあたって必要となる基本的な理学療法評価の過程を経験することで、理学療法治療計画を考える基盤を形成することを目的とする。【概要】臨床実習協力施設において、学生が臨床実習指導者の指導および監督の下で実習施設のチームの一員として関わる臨床参加型実習 (CCS) を主として行い、患者・利用者の評価を経験し、理学療法の導入過程を実践する。【到達目標】患者や利用者が有する問題の解決のための情報収集、評価計画、実践、統合と解釈、問題点の分析など、一症例の評価過程について関わりを持ち、指導者の臨床推論や医学的根拠を理解し、説明ができる。</p>				
授業形式・方法	<input checked="" type="checkbox"/> 対面授業 <input type="checkbox"/> 講義 <input checked="" type="checkbox"/> 演習 <input checked="" type="checkbox"/> PBL <input type="checkbox"/> 反転授業 <input checked="" type="checkbox"/> ディスカッション・デバート <input type="checkbox"/> 遠隔授業(双方向型) <input checked="" type="checkbox"/> 実習 <input checked="" type="checkbox"/> 実技 <input checked="" type="checkbox"/> グループワーク <input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション <input checked="" type="checkbox"/> 実習・フィールドワーク <input type="checkbox"/> 遠隔授業(自主学習) <input type="checkbox"/> その他 ()				
学習上の助言	<p>評価実習は、これまでのすべての必修科目の知識に加え、習得してきた検査・測定技術、問題解決のための論理的思考、社会スキル (社会人・医療人としての誠実さ、真摯さ、協同性など) が試されることに十分留意すること。学外実習は対象者や実習指導者だけでなく、施設のスタッフの方々など多くの方の協力と支援のもとに可能になっている。学生はこのことを十分理解し、協力していただいた方々、施設への感謝の気持ちを忘れず実習に取り組むこと。</p>				
教科書	理学療法学科より配布する最新の臨床実習の手引き				
参考書	これまでに購入してきた各必修科目の教科書および配布プリントなど				
外部教材					
学生が達成すべき行動目標				関連卒業認定・学位授与方針	
①	社会人・医療者としてふさわしい態度や行動をとることができる			RH (1) , (6)	
②	対象者の問題点を把握するために適切な評価項目を列挙できる			RH (1) ~ (3)	
③	一般情報や評価結果から問題点・目標・治療立案までの思考過程を理解できる			RH (1) ~ (5)	
④	対象者の状態に合わせた評価を模倣、実施できる			RH (1) ~ (5)	
⑤	理学療法士業務の初歩的な補助ができる			RH (1) ~ (6)	
⑥	一症例に必要な評価過程について説明 (議論・発表) できる			RH (1) ~ (3) , (5)	
授 業 計 画					
I 総論					
<p>1) 【科目の説明】この科目では CCS による臨床参加型実習を通じ、多様な症例を経験し、汎用的理解力と広範の実践力を養う。一方で、一症例の評価過程に深く関与し、臨床推論力を高めることで、専門的思考を身につける。これにより、幅広い知識と、的確な評価判断の双方を実践的に習得することを目指す。9月下旬~12月中旬に学外実習5週間(200~225時間)と、事前事後の学内実習計1週間(40~45時間)で構成される。学外実習計画の詳細は配属された各施設により異なるが、指導および監督の下で臨床参加型実習 (Clinical Clerkship : CCS) を主として行う。理学療法治療計画を考える基盤を形成するために、患者や利用者が有する問題の解決のための情報収集、評価計画、実践、問題点の分析、治療方針の立案を経験する。また、社会人としての対応 (指導者への報告・連絡・相談、スタッフへの挨拶、職場ルールの遵守など) や、医療従事者としての対応 (不快感を与えない身だしなみ、清潔・衛生管理、情報保護など) が求められる (詳細は実習の手引きを参照)。</p> <p>2) 【履修条件】①専門基礎科目群および専門科目群の授業科目のうち、3年次終了までに履修することができる必修科目の単位を全て修得していなければ履修できない。②学外実習を遂行できる最低限必要な理学療法に関する能力 (3年前期終了までの必修科目における知識、技術、思考力、社会的スキル、倫理観) を有していること。</p>					
II 各論					
<p>1) 【事前学内実習 : 20 時間】</p> <p>事前実習として、3つの内容に取り組む。この課題では、評価実習による学修効果を最大限に高めるため、知識と技能を実習が遂行可能な状況まで高め、学外で実習を行うことの意義を科目の目標と個人目標の双方から整理することにある。</p> <p>1-1<オリエンテーション : 2 時間>学外実習科目の基本姿勢、感染対策、評価実習の目的・概要・到達目標、評価実習の単位取得に必要な項目、スケジュールなどについて解説する。</p> <p>1-2<学年ポートフォリオの作成と教員との面談 : 2 時間>自己の内省、将来設計、求める理学療法士像などについて、面談を通じて明確にする。評価実習における個人の達成目標・行動目標を設定する。</p> <p>1-3<学外実習前評価 (技能試験および口頭質問) : 16 時間>模擬患者情報を基に、必要な検査・測定、考慮すべきリスク、疾患を想定した学生の理学療法評価能力を評価し、履修条件②を満たしているかを確認する。学外実習前評価で合格基準に達しない学生は学外実習には配置しないため、これまで受講してきた必修科目の知識の復習、検査・測定技術の反復を十分にすること。なお、表記の時間は試験時間に加えて平均的な学生に最低限必要な練習時間を含んだ時間である。自己学習についてはこの限りではない。</p> <p>2) 【学外実習 : 200~225 時間】</p> <p>2-1<実習の形態>評価実習では CCS を主として行い、その内の一症例において一連の評価過程を経験する。CCS とは、「助</p>					

手として診療チームに参加し、実体験を通して、セラピストとして修得すべきスキルと態度、倫理観を育成していく臨床実習形態」であり、理学療法士としての汎用的理解力と広範的实践力を養う。 CCS の特徴として、以下の 3 点がある。

①技術を一つの単位として学習を進める（「ROM 測定」、「質問紙を使用した面接」等のように技術項目ごとに対象者を担当し、より実践的な技術を習得する）。②見学し、模倣し、実践する。全ての技術項目について、「見学」「模倣」「実施」の段階を踏むことを原則とする（詳細は実習の手引きを参照）。③できることから実践する（CCS ではできる技術を一つの単位として複数の対象者を担当し、十分模倣したうえで実施に至る。評価・治療の順序性は必要なく、より多くの技術項目を経験し、習得を目指すことになる）。なお、実習指導者が患者・利用者に対してどのように技術を工夫、適応しているかなどを観察や解説から理解する思考過程の習熟も必要であり、模擬カルテに記録することで思考力を醸成する。CCS では主体的に学修する姿勢が重要であり、積極的に指導者へ質問し、評価の意図や選択肢について議論することが期待される。一症例における一連の評価過程について、指導者の臨床推論や医学的根拠を理解し、説明ができることは到達目標であり、これは専門的思考や臨床推論力を高めることを示す。そのため、実習期間中には CCS においても一症例について情報収集、評価計画、実践、統合と解釈、問題点の分析などの評価過程を経験し、**指導者の解説、ディスカッション、自己学習を通じて指導者の臨床推論や医学的根拠について理解する。**

2-2<評価実習で修得するスキル>社会的スキルはルールやマナーなど社会人としての基盤である。対象者やスタッフとのコミュニケーションなど、対人能力も含む。「主体的に行動する」「TPO に応じた言葉遣いや配慮をする」などは態度にあたる。臨床的スキルは運動スキルと認知スキルに分けられる。運動スキルの修得はスキル修得者（臨床実習では実習指導者）を観察し、模倣・試行を繰り返して修得されるもので、臨床実習ではこの過程をチェックリストで確認する。認知スキルとは「臨の知」と言われるような、知識を臨床で応用し、状況に応じて行動・判断することで、経験を通じてしか学ぶことができない。実習指導者の解説を受けながら伸ばしていく必要がある。

2-3<評価実習におけるその他の注意点>臨床実習協力施設の規則を遵守し、指示に従うこと。実習記録を作成し、次の日に実習指導者に提出すること（最終日の記録は指導者への提出は不要であるが、作成すること）。適宜、必要な事項について予習・復習を行うこと。

2-4<評価実習スケジュールの例>

	CCS 中心の実習内容	一症例における一連の評価経験（CCS）
1 週目：	実習計画の確認、オリエンテーション、施設見学、運動器疾患見学、中枢神経系疾患見学	評価項目の選定、コミュニケーション
2 週目：	運動器疾患①模倣・練習、運動器疾患②見学・模倣、中枢神経系疾患①模倣・練習	一症例における評価項目の見学、模倣、実施
3 週目：	中間評価、運動器疾患①模倣・実施、運動器疾患②模倣・実施、中枢神経系疾患①模倣・練習	一症例における評価項目の見学、模倣、実施、指導者とのディスカッション（統合と解釈）
4 週目：	急性期見学、慢性期患者見学、運動器疾患②実施、中枢神経系疾患①実施、中枢神経系疾患②見学・模倣	一症例における評価項目の見学、模倣、実施、指導者とのディスカッション（問題点の抽出、目標設定、治療立案）
5 週目：	最終評価、評価実習のまとめ、実習の振り返り	一症例の評価まとめ

2-5<作成物>

技術チェックリスト：学生がどのような評価・治療項目にどの程度関与したか「見学」「模倣」「練習」「実施」および「未達成」の段階を記載する。ポートフォリオに保管する。

実習日誌・模擬カルテ：各日に見学や担当した患者・利用者の中から 1～2 症例を選び、SOAP 形式で模擬カルテを作成する。実際に治療や評価を行った場合には、治療結果や評価結果に対する考察を記載する。一連の評価過程に関わりを持った一症例についても、記載してよい。ポートフォリオに保管する。

実習状況評価表*：指導者によって学生の社会的スキルおよび運動・認知スキルを評価する。また、出席状況を記録する。学外実習期間中に中間評価を行うことで、学修すべき目標を再確認する。

3) 【事後学内実習：25 時間】

学外実習の後には学内で振り返りを行う。同学年での発表会や、教員との面談により、自己の学びや課題を明確化し、総合臨床実習へつなぐ。

3-1<症例グループディスカッションおよび報告書作成*：8 時間>到達目標である一症例の評価過程について、指導者の臨床推論や医学的根拠および自らの考察により、症例の報告書を作成する。数名の学生グループ内で学外実習の内容や経験を共有し、報告書の内容を深める。

3-2<成果発表*：5 時間>学外実習での学びについて、実体験や文献検討、グループディスカッションの内容を基に発表をする。症例に対する評価の工夫や、実習中に学んだ実技、希少な疾患での経験など、聴講している学生への情報共有を目的として、講義、演習、実習などの発表形式でおこなう。

3-3<実習振り返り文書作成（ポートフォリオ）：5 時間>実習前のポートフォリオで計画した目標に対し、自らの到達度を判定する。実習中に作成した模擬カルテや、実習指導者からの指導内容について復習し、次年度の総合臨床実習に対する自ら

【2025 年度/専門科目領域/専門科目群/リハビリテーション学科 理学療法学コース/理学療法学科】

の課題を設定する。

3-4<担当教員との面談：2 時間>実習の振り返り、実習記録を基に、実習の経験について担当教員に報告をする。また、次年度に向けた自己の内省、総合臨床実習の相談、国家試験対策など実習後の活動にも言及し、明確にする。

3-5<客観的臨床能力試験* (OSCE)：5 時間>整形疾患、中枢神経系疾患の模擬患者情報を基に、必要な検査・測定、考慮すべきリスク、疾患を想定した評価を実施する。これまで受講してきた必修科目の知識の復習、検査・測定技術の反復を十分にすること。なお、試験時間に加えて最低限の練習時間を含んだ時間である。自己学習についてはこの限りではない。なお、表記の時間は試験時間に加えて平均的な学生に最低限必要な練習時間を含んだ時間である。自己学習についてはこの限りではない。

「*」は成績判定に関連する項目を示す。

必要時間 (単位：時間)：学外実習 (5 単位：200～225 時間)、学内実習 (1 単位：40～45 時間)

達成度評価

総合評価割合 (%)		試験	レポート	成果発表	ポートフォリオ	その他	合計
		20	0	40	0	40	100
総合力指標	知識・技術力	15	0	10	0	5	30
	思考・推論・創造する力	0	0	10	0	10	20
	協調性・リーダーシップ	0	0	5	0	5	10
	発表・表現伝達する力	0	0	5	0	5	10
	コミュニケーション力	0	0	5	0	5	10
	取組みの姿勢・意欲	0	0	5	0	5	10
	問題を発見・解決する力	5	0	0	0	5	10

評価のポイント

評価方法	行動目標	評価の実施方法と注意点	フィードバックの方法	
試験	①	客観的臨床能力試験 OSCE (20%)		
	②			✓
	③			✓
	④			✓
	⑤			
	⑥			
成果発表	①	グループディスカッションおよび成果物提出* (20%) 正課発表会 (20%)		
	②			✓
	③			✓
	④			✓
	⑤			
	⑥			
ポートフォリオ	①	学年ポートフォリオ、外実習中の模擬カルテ、本実習での作成物、振り返りなど、実習に関連する一連の書式を保管する。 成績には含まれないが、ポートフォリオの作成および教員との面談がない場合は必要時間に満たないため、単位を認めない		
	②			✓
	③			✓
	④			✓
	⑤			✓
	⑥			✓
その他	①	学外実習評価：社会性 (実習状況評価表) (10%) 学外実習評価：専門課題 (実習状況評価表) (30%)		
	②			✓
	③			✓
	④			✓
	⑤			✓
	⑥			✓

備 考

他 担 当 教 員	粕山 達也、三科 貴博、関口 賢人、関根 聡美、源 裕介、石井 智也、福田 京佑、
教員の実務経験	理学療法士として複数名の臨床実習指導の経験を有している。理学療法士として7年の臨床経験がある。
実践的授業の内容	臨床実践を行う実習のため、理学療法の技術はもちろんのこと、理学療法評価の過程を臨床で学修する。実習前後には学生個々に対して教員が指導するため、科目担当者 (坂本、福田) は45 時間、他担当教員は41 時間の指導を行う。
そ の 他	本科目においては、単位履修のための時間は実際にかかった時間を用いる。評価実習の成績は、達成度評価の試験、成果発表、学外実習評価の合計値を参照し決定される。配置する実習地は、学生の希望、GPA、抗体の有無、ワクチン接種歴などを総合的に加味し、学科で決定する。総合評価割合を参照し、6 割未満を再試験の対象とする。再試験の内容は、各項目の成績の総合的評価と、6 割未満の評価項目について検討する。なお、「臨床実習の手引き」を熟読し、シラバスに未記載の基本的な規範を遵守すること。規範が遵守がされない場合には、学外実習の取り下げなども検討する。